The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エベニーザー・クックのデザイン教育 ： 外なる自然から子どもの内なる自然へ
Author(s)	要, 真理子
Citation	デザイン理論. 2018, 71, p. 42-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67724
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

エベニーザー・クックのデザイン教育
── 外なる自然から子どもの内なる自然へ ──

要真理子／跡見学園女子大学

はじめに

英国の美術教育者エベニーザー・クック（Ebenezer Cooke, 1837–1913）は，ルソー，ペスタロッチ，ジョン・ラスキンなど先人たちの考えを継承し，これらを英国内で実践的に広めた人物として知られている。しかし彼の仕事はほとんど，先人たちの華々しい業績の陰でその意義が見過ごされてきた。本発表は，原著の翻訳作業を通じて明らかとなったエベニーザー・クックのドローイング教育の実践を，当時のデザイン教育や社会背景と照応させつつ検証し，その意義を再確認しようとするものである。

２種類のデザイン教育

英国では，1830年代から国内各地にデザイン学校が創設されていたが，とりわけ1852年から73年の間に，ヘンリー・コウル主導のもとで，美術教育が拡張され，教育機関が増大した。その背景には，既存のデザイン学校の改善と美術教育者のための教育施設が構想されるようになったという経緯がある。

コウルらの実用美術局（後の科学・芸術局）が提案したデザイン学校のカリキュラムは，リチャード・レッドグレイヴが構想したロイヤル・アカデミーに準ずる模写を基本とする素描と，リーズのデザイン学校長のウォルター・スミスが推進した ── 後にサウス・ケンジントン・アプローチと呼ばれることになる ── 幾何描画やフリーハンド描画に代表される方法論が採用された。

国家が教育に介入し，国立の教育制度が整えられつつある一方で，美術・デザインの領域では改革への反発が生じ，こうした国立の美術学校にはほとんど無関心だったにもかかわらず，その鏑矢として頻繁に引用されたのがジョン・ラスキンの発言だった。当時，美術・デザイン教育の目標は，社会全体に役立つ職業人の輩出か，とりわけ労働者階級に向けられた自己陶冶かのいずれかであり，改革派はもちろん，前者を支持していた。ラスキン自らも，同時代の功利主義的な人間を作り出すためのドローイング教育と距離を置いていたため，彼の発言が守旧派に利用されたのだと言う（S. MacDonald, *The History and Philosophy of Art Education*, 1970）。

ラスキンの素描クラスを引き継いだエベニーザー・クックもまた当時の描画教本を手本とした科学・芸術局の教育法には否定的であった。教本には，フリーハンド描画のための外形線が描かれており，ラスキンは，この外形線を，自然のなかに実在しないという理由から否定した。しかしながら，クックにとっては自然観察に基づいたラスキンの指導法も未だ不十分であった。たしかに，ラスキンは，自然の対象に基いて描画指導を行ったが，クックの言葉を借りるなら，「自然対象の直接的な再現を超えた指導へと進むことはなかった」し，何より，彼の「Go to Nature（自然へ赴け）」という言葉には「子どもは含まれていなかった」のである（E. Cooke, “Experiments in the teaching of young children”, 1908）。

外形線と楕円，そして子どもの本性

それでは，クックが目指したドローイング教育とはどのようなものであったのだろうか。

「子どもの本性」に向かうとき，クックの関心はラスキンが主張する外的対象としての自然の重要性から子どもの内面へと明らかに変化している。そのとき，クックは子どもの生来の力によって最初に生み出される楕円曲線や直線を強調する。この形態はすなわち，「殴り書き」という子どもの自発的な生産物なのだが，当時これが（いずれ外形線として何かを表象する）ドローイングの最初の段階と考えられてはいなかった。

そこから，クックは子どものドローイングに関して「段階」に応じた変化とその教授法を模索するようになる。「正確さか関心か，技術的スキルか子どもの本性かの選択……子どもの本性は私たちによって修正不可能なものである。子どもの本性に服従することによって，私たちは学び，共感し，克服しなければならない」（E. Cooke, “Our Art Teaching and Child Nature”, 1886）。

段階説の必要性

このような子どもの本性を重視するクックの態度は，一見するとルソー，ペスタロッチ，フレーベルのそれと一致する。そうすると，アメリカの教育学者ドナ・ケリーに代表される先行研究者たちが述べているように（D. Kelly, *Uncovering the History of Children's Drawing and Art*, 2004），クックはフレーベル主義者，あるいはペスタロッチ信奉者として同時代の技術の習得を目標としたドローイング教育を批判しただけなのだろうか，その一方で，同時代の心理学者ジェイムズ・サリーに由来する「発達段階」という考え方がその当時なぜ必要とされたのか，といった疑問が生じてくる。

19世紀後半のサウス・ケンジントン美術学校においては，発明や想像力が否定され，模倣こそが新しい様式を生み出すと信じられていたため，新奇な形態や組合せがなにゆえ形作られるのかを説明することは不可能だった。お手本や外的対象との関わりだけでは説明のできない何ものか，それこそが私たちの個人的な能力，しかしそれはロマン主義的な神性と結びつくような天賦の才ではなく，訓練可能な能力でなければならなかった。そこで個体発生論や段階説のような考えが必要とされたのである。

おわりに

以上，19世紀後半から20世紀初頭にかけての英国近代産業社会を背景として展開した美術教育者エベニーザー・クックのドローイング教育を彼の論稿に照らしてその内実を検証した。そこから次のことが明らかとなった。すなわち，ルソーをはじめ，フレーベルやペスタロッチのような子どもの神性を重視するロマン主義的な観念論を中核とした教育が移入されたとしても，英国の近代産業社会においては何よりも功利主義的な，あるいはイギリス経験論的な人間観が20世紀を超えてもその根底に有り続けた。それゆえ，欧米諸国のフレーベルの追随者がドローイングをあくまでも個々の子どもの望ましい発達の手段と捉えたのとは異なり，その一方で，職工やデザイナーの輩出を目指す官立の教育への反動としてジョン・ラスキンの道徳を重んじる美術教育が英国内に台頭してきたにもかかわらず，クックのように，ラスキンの改革を継承する者がまた，ハーバート・スペンサーに代表される社会進化論，ならびにクックの友人ジェイムズ・サリーの心理学と手を結び，段階説のような考えへと至るのである。

参考文献

要真理子・前田茂監訳『西洋児童美術教育の思想 ── ドローイングは豊かな感性と創造性を育むか？』東信堂，2017年